
300 second

ゆんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

300 second

【NZード】

NZ690Q

【作者名】

ゆんた

【あらすじ】

世界はたった今生まれて、五分後に死ぬ。そんな世界を切り抜いた掌大のお話。

世界はたった今生まれて、五分後に死ぬ。

三百秒の命なんてあまりにも短い。不幸だったのは世界が終わることを、まともな思考で理解してしまっていることだ。

世界は神様によって作られる。だから神様の気まぐれで壊されるのは自然だ。出来の悪い焼き物を叩き割るようなものだろう。生まれた世界は数知れず、しかし壊された世界も数知れない。ここは壊される世界の一つというだけの話だ。

神様はいたずら好きだ。ついでに悪趣味である。だから思いつきで、たった五分間しか続かない世界を作った。

僕の役割は観察者だ。無数に生まれる世界の、不出来な部分を調査するのが仕事である。そのため僕は例外的に魂の洗浄を行わないまま輪廻転生を繰り返すことになっている。この体は十七歳そこそこだけど、精神年齢だけなら神様にも匹敵すると思う。

今の僕は高校生で、日曜日で、休日を楽しんでいるという設定らしい。ベッドに寝転がる僕は、漫画を斜め読みしながら「ロロロ」と過ごしている。

開いているページには派手なアクションシーンが描かれている。神様も思いつきにしては芸が細かい。矛盾が起きないように、文化や歴史、生活の基盤から政治システム、今日生まれる人から死ぬ人まで、全て設定しているのだろう。まあ、全能である神様の力を使えば、意外と簡単なのかもしれないけれど。

さて、僕は何を観察すればいいのだろう。いくらなんでも五分間は短すぎると思う。せめて、写真のように瞬間を切り取って、神様の下へ持ち帰るつと思う。

今日は紅白試合の日だ。今日でレギュラーメンバーが決まる。練習が始まるまで後五分。体も温まつていい具合だ。

俺はいつもより一時間早く来て、準備運動とストレッチを入念に済ませていた。それからバーネットを張つて、一人で直上トスを始めた。ボールの感覚を手に染み込ませるんだ。体の延長のようにボールを扱うんだ。大丈夫、今まで練習を重ねてきた。努力は裏切らないって、昔の偉い人も言つていた。

練習前から喉が渴いてしまった。壁際に座つてスポーツドリンクを飲む。体育館は暑く、夏の日差しが窓から差し込んでいた。外からはセミの鳴く声も聞こえてくる。そうだ、帰つたらアイスを食べよう。母さんが食べてしまつたかもしれないけれど、それなら買いつつでもらうまでだ。だって、あれは俺が金を出して買つたものなんだから。

そんなことを考えていると、一人の女子生徒が入ってきた。ああ、今日は半面を女子バレー部が使う日だったつけ。彼女は俺と目が合ふと軽く頭を下げる、それから慌てたように目をそらした。最後の行動だけが腑に落ちなかつたけど、まあいいや、どうせ名前も知らない女子だし。まさか俺に気があるわけじゃないよな。それなら対応を変えさせてもらうけれど。

そろそろ始まるかな、と思うと、続々と体育館にメンバーが集まつてきた。みんな笑顔で談笑している。どれ、俺も混ざりうつか。真剣になるのは試合のときだけいいや。そう思つて俺は駆け出した。

練習が始まるまでには時間があるけれど、私はいてもたつてもいられなくなつて家を出た。夏の日差しが目を眩ませる。眩しい。気温もこれからどんどん上がっていくのだと思うと憂鬱になる。

私の家は学校と目と鼻の先だ。徒歩一分もかかるない。体育館玄関から中に入ると、ボールの音がした。誰だろう。男子バレー部の練習も、まだ始まつていはないはずなのに。

体育館に入った。そこには一人で練習をしている男子生徒がいた。じつと見たけれど、どうやら知らない人らしかった。ちらり、と目が合つて、思わず会釈した。そしてその反射的な行動が悔しくて、無理やり目をそらした。きっとあの人、変な人に会つたつて思つてる。でもいいや。気にしないことにして更衣室へ急ぐ。別に急ぐ必要もないのだけれど。

今日の練習は何だらう。あんまり厳しいのは勘弁してほしい。だつて、今日は暑いから。本当に暑い。まだ午前中なのに、三十一度くらいあるんじゃないか、これ。更衣室も湿気がこもつていて息苦しい。

まあそれも、これから体を動かせばすつきりするだらう。体を動かすのは楽しい。人生にはメリハリが大切なんだ。動くときは動いて、思いつきリストressを発散させる。これ、意外と大切。ご飯もおいしいし。

さあ、みんなが来る前にネットを張つてしまおう。それからあの男子生徒みたいに、自主トレーニングでもしていようか。

車から出ると天国と地獄の気分を味わえる。外は午前中だというのにセミが鳴いてい。北海道から赴任してきた身としては信じられない。雪や氷が恋しい。

教師はもつとフランクな服装をしてもいいと思うのだが、新人という手前、スーツで決めたほうが印象がいいかと思って、俺は全身をスーツで固めている。通気性は最悪で、何もしていないのに背中がじつとりと濡れて気持ちが悪い。とつとと中に入ってしまおうと足を速めた。真夏に長袖という時点で間違っている。明日からはクールビズにしようとしたが決めた。

中に入つても暑さはあまり変わらない。日陰になつただけで、気温はあまり変わらないらしい。それでも頭を焼く光線から逃れられただけでも良しとしよう。職員室に行けば空調も効いているだろうし。あ、そう言えば、理科室の備品のチェック、しなくちゃ駄目なんだっけ。ああ、くそ、昨日やつとけば良かった。面倒くさいけど、明日から授業が始まるし、足りないものがあつたら補充しておかないとまずい。いくらか肩を落としながら、職員室とは逆方向に進んでいく。せめてもの抵抗として、上着を荒々しく脱いだ。

その上着が、階段から降りてきた女性とぶつかった。きや、なんていかにも女性らしい声を上げて、プリントの束がばらばらと階段に散らばる。ええい、今日は厄日だ。テレビの占いを信じて意気揚々と出てきたのは間違いだつた。俺はもつと気長に事を運ぶタイプなんだよ。

すいません、どうぞ言つて俺はプリントを拾うのを手伝つた。相手は一年先輩の教師で、ほとんど話したことがない。挨拶をするくらいだ。だつて、話しかけにくい。年齢が近いといつても、業務のことを聞くならもつと先輩がいるわけだし。

プリントを拾つて返して、もう一回謝つておく。これから先に響

くと精神衛生上よろしくない。するとその女性教師も謝つてきて、階段の中ほどで頭を下げ合う社会人二人、なんて奇妙な構図が出来上がった。

音楽室が一階にあるなんて間違ってると思う。女性の体力にまったく配慮していない。なんて、誰に向けてでもない愚痴をぶつぶつぶつぶつ咳きながら、私はプリントされた楽譜の運搬作業に追われている。

運搬、という表現も、今日に限っては誇張ではないと思う。とにかく暑い。昔からここに住んでいる私だけど、それでも暑い。きっと二酸化炭素とか、メタンハイドレードとかの影響で地球温暖化が進んでいるんだ。許すまじ温暖化。いや、むしろオゾン層を労われ人類。

階段が見えてきた。暖かい空気は上に行き、冷たい空気は下に行く、という原理を思い出した。けれど実生活で、一階の方が涼しい、なんて思ったことはない。あれか、成層圏と地表くらい違わないと言葉がないのか。ならエアコンを付けてほしい。私立学校なのだから、もう少し設備を良くしても良いと思う。ああ、ふらふらしてきました。

ふらふらしていたら、階段の途中で何かに当たった。楽譜が手から落ちていく。ばさばさと嫌な音を立てて、地面に紙の海が広がった。何に当たったかと見直せば、スーツの上着だった。そしてその持ち主の男が、ぼそぼそと謝罪の言葉を吐いている。もう怒る氣にもなれない。仕方がないから楽譜を拾い始めた。

て言うかこいつ、新人の教師じゃない。先輩を労われこのやうう、なんて声には出さないけれど。ああ、汗が伝ってきた。なけなしの化粧が崩れる。ラインとか付いたらどうしてくれる。

拾い終わって、それから男性教師は再度頭を下げてきた。無視してやろうかとも思ったけど、なんだか氣の毒だったので、こちらも頭を下げておいた。こういうところが日本人だと思う。まあ、協調性があることは悪くない。そして、自分たちが首振り人形セツトみ

たいになつてゐると気が付いた。

垣間見て、まあ、これなら五分間で終わっても良いかな、なんて結論を出した。漫画のほうがよっぽど刺激的だ。なんて平坦な日常だろう。

「じりん、と寝返りを打つ。

何回目の転生だかは覚えてないけど、大体こんな感じの日常ばかりだったと思う。地球で再現されるのは、どこまでもフラットな日常ばかり。もしかして、天に昇るような幸福や、身の凍るような悲劇を見たら考えが変わらぬかもしない。いや、たぶん変わらない。それはどこまでも日常の延長で、幸福も悲劇もありふれすぎているから。人間という種類が、他者と完全な同調が出来ない以上、起伏なんてありえない。個々人の日常はそのまま、平坦なまま広がっていく。

ああ、いや、一つだけ起伏を作る法方があった。

平坦同士を重ね合わせること。それだけが人生に起伏を作る方法だ。ああ、そうか、僕は視点が狭かつたんだ。もっと広く、人と人との関わりにフォーカスするべきだった。でも、もう世界は終わってしまう。持ち帰るのは、今回も空虚な結果だけだ。

でも、次からはもう少し、身のある話を持ち帰られると思う。少しずつでも、神様が作る世界が良くなっていますように。だからこれまで、さよなら、世界。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7690q/>

300 second

2011年4月29日18時40分発行